



★歌のメモリー 回想五十首選
「竹山 広」

選・文 奥田亡羊 (心の花) 所属

Boyo Okuda

傷軽きを頼られてこころ慄ふのみ松山燃ゆ山里燃ゆ浦上天主堂燃ゆ

水のへに到り得し手をうち重ねいづれが先に死にし母と子

くろぐろと水滴ち水にうち合へる死者満ちてわがとこしへの川

人に語ることならねども混葬の火中にひらきゆきしてのひら

この坂のここにこときれゆきたりしひとつの顔をのがれつづけつ

死の前の水わが手より飲みしこと飲ましめしことひとつかがやく

追ひ継りくる死者生者この川に残しつづけてながきこの世ぞ

浄き死をかならず死なむある夜の覚悟の如きものたちあがる

噴水を終りたる夜の泉にて苦役のごとし水の繋るは

おそろしきことぞ思ほゆ原爆ののちなほわれに戦意ありにき

髪触るるまで子の墓にうなかぶす妻のうしろに寄りゆきがたし

原爆の死を傍観し来しものに死はありふれておそろしく来む

ながきながき昭和窮りし寂けさやことりとパンを出すトースター

ふかき礼するとき人はみどりこの仰け反るあたま腕に支へき

【とこしへの川】

【たげやま・ひろし】 (一九二〇—二〇一〇)

大正九年長崎県生まれ。二十五歳で被曝。昭和五十六年、原爆体験をうたった第一歌集「とこしへの川」を出版。平成十四年、「竹山広全歌集」で迢空賞、斎藤茂吉短歌文学賞、詩歌文学館賞を受賞。

【葉桜の丘】

【残響】

おほいなる天幕のなか原爆忌前夜の椅子らしげまりかへる

『二脚の椅子』

一睡ののちのたふとき一睡を終れば高き月ありにけり

居合はせし居合はせざりしことつひに天運にして居合はせし人よ

『千日千夜』

炎あげて崩れむとする家のまへ殉死のごとく燃ゆる自動車

炎去りゆきし瓦礫を人掘れりいのち得てすることのはじめに

サティアンに背に立つ富士は深夜わが茶の間の奥にかがやき出でつ

今生の別れみじかく言ひ合ふに標準語もて姉のいふかも

羊雲たかだかと暮れ椅子の上のころはながく死者を伴ふ

万歳と声を揃へてさし上ぐる腕にさびしきつけ根ありたり

酒鬼薔薇聖斗まことにわが子かといかなる淵に墜ちていひけむ

二万発の核弾頭を積む星のゆふかがやきの中のかなかな

なきがらの歯の美しと悲しみしことありしかど誰が歯なりけむ

さくらよりさくらに歩みつつおもふ悔恨ふかくひとは滅びむ

われの死がかずかぎりなき人間の死になるまでの千日千夜

迷ひふかき人間は深夜起き出でて大いなる昆虫図鑑をひらく

『射禱』

一分の黙禱はまこと一分かよしなきことを深くうたがふ

暗黒の雨をぞおもへ三宅島の無人の家をおしつ々む雨

ニューヨークのかの日の空を落ちし人一年過ぎてわが前を落つ

『週年』

天命

竹山広さんはまわりの風景から浮き上がって見えるような、輪郭の美しい方でした。

竹山さんに初めてお会いしたのは二〇〇五年の早春です。わたしはテレビの番組をつくる仕事をしていて、NHKの「ころの時代」という番組で竹山さんに原爆の体験を語っていただきました。亡くなられる五年前のことです。

インタビューは長崎市内の爆心地公園で撮影しました。竹山さんがそこを訪れるのは何年ぶりかのことだったようです。きれいに整備された公園を見て「よその家の庭のようになってしまつて」とつぶやかれたのを鮮明に覚えています。

公園でうかがったのは第一歌集『とこしへの川』で「死の前の水わが手より飲みしこと飲ましめしことひとつかがやく」と詠まれた一人の少女のお話でした。竹山さんはこのときの取材を歌集『空の空』の連作「声あぐる水」に詠まれています。

・かがやきて声あぐる水この川のかの日の死者をわれは語るに

八十二歳半ばをすでに生き終へし五体おもたしなかんづく首

六十年むかし八月九日の時計の針はとどまりき いま

『空の空』

思ひ出づることなく人は歩むのかそこは深井のありたるところ

殺したる夫を上下両断にして捨てたりといふ顔の出づ

『眠つてよいか』

試しみてある夜おもひき死者の胸の両手の重さ耐へがたからむ

おんおんと天に怒りをゆり上ぐるサイレンのながきひと息くるし

うち伏しし家より空を蹴上げるし二本の足よ しゃうがないことか

死ぬときは死ぬとかならず言つてよと泣きゆきし妻しづかになりぬ

この足でまた歩まんと約すときかならずといふ一語先立つ

死にどきとなかなか思ひ至らざるわれにかがやく八月の竹

夕べの戸閉しつと思ふいつの世も自信に満ちてみどりごは泣く

浄き死をいかに死なむとあらためてまなこを瞑るとき至りたり

『地の世』

キリストの救ひとたのみきたる死に近づくひと日ひと日おそろし

生きてゐるだけでよいからと言ひくるる汝をもやがておきてゆくべし

眠り薬さいごの二錠いつぺんに服みて人なき眠りをぞせん

われは死にわれの子も死になほのこるこの世のあしたゆふべ見ゆるを

娘焼くけむり姉を焼くけむり十年高く立ちのぼるなり

原爆を知れるは広島と長崎にて日本といふ国にはあらず

・死の際のわきて痛ましかりしひとりつひに語りき六十年かけて

竹山さんの故郷、長崎県北部の田平町も訪ねました。平戸の海を見下ろす高台の集落で、その中心に重要な文化財の瀬戸山天主堂が建っています。隠れキリシタンを先祖に持つこの集落では、優秀な子どもは神父になるように育てられました。竹山さんも十二歳で長崎市の神学校に進んでいます。青年時代の竹山さんはオルガンと落語と手品が得意で、子どもたちを天主堂に集めては讚美歌やグレゴリオ聖歌をうたい、一緒に遊んであげていたと、竹山さんの姪にあたる方からうかがいました。

取材の合間、わたしは竹山さんになぜ神父にならなかったのか聞いてみました。すると竹山さんはしづかに笑って「神様に召されましたが、わたしは選ばれませんでした」と答えられました。

竹山さんは天命を問いつつ、歌を詠みつづけられた方だったのでないかと思えます。